軍国少女から
多彩な
平和教育者への路

鞠谷美規子 著

九十九年を生きた
米田先生
ヨネブー
鞠谷先生
一寿先生の物語

はじめに

今年(2024年)は、私は1925年生まれで、今、99歳を生きています。九十九年を生きただなんて、何と恐ろしいことでしょうか。昔、半世紀以上前の授業ですが、阿片戦争で当時の大国「清」が英国に敗れ、江戸幕府は鎖国体制の検討を開始した、と話しました。日本の全面的開国、つまりは近代化への動きのはじまりでした。南京条約(1842年)、北京条約(1860年)を経て、最終的には1898年に香港島と九竜半島のつけ根にある新界までを、英国が九十九年間租借する取り決めが合意されたのです。人生五十年の時代だったので、中国では古来「九十九年」は数えられないほどの長い年数を意味していました。九十九年だから香港は「半永久的」に失われてしまった、と解釈した清朝の官吏もいたでしょう。私はそんな半永久的な人生を生きてきたのです！

ちなみに、香港は99年後の1997年に中国に返還されました。昔日の大英帝国の勢いをなくしたイギリスにとって、植民地の維持に見合うメリットが失われたからです。もしイギリスがいまだ世界的な覇権を維持し、そして中国がもたもたしていたなら、半永久的になっていたのかもしれない。歴史に if は禁物なのですが。

私の九十九年、はじめの20年は軍国主義的教育のもとで生徒として教育を受け、私は当時の「典型的な」と言うべき軍国少女となりました。戦争下での奈良女子高等師範学校(奈良女高師、現在の奈良女子大学)での教育は、軍国教師にむけての仕上げ(のはず)だったのです。敗戦(1945年8月)によってそれが揺らぎ煩悶するなかで、9月には母校の大阪府立夕陽丘高等女学校で教職に就きました。空襲後の瓦礫のなかを歩き、教室で後輩たちの前に立ってその明るく真摯な瞳に見つめられ、私は圧倒されました。この娘たちを私と同じ軍国少女にしてはならない、と具体的に考えたわけではありませんが、教師たる自分の役割に胸がいっぱいに

なって、なぜか泣けてきたのです。

その後は平和憲法のもと、教師として教育の現場で科学的・民主的な日本歴史を旨として、生徒たちと一緒に学んできました。敗戦による男女共学の実施により大阪府立天王寺高校へ転任となり、私にとって戦前にはまったく考えられなかった「新しい」教育が要求されたのです。生徒たちとともに懸命に学ぶなかで、結果的には一段上の教育経験をつむことができたと思います。

後半の半世紀は、社会人教育と日本舞踊を中心に芸能の分野で、家庭の主婦を含めた成人の方々とともに、厳しくそして楽しく活動を続けてきました。学校教育での経験が、結果的には成人教育の場でも芸能関係の伝授においても、大きな役割を演じたのですが、意識的にそんな工夫をしたというよりは私にはそれ以外のやり方なんかできなかったのです。

そんな私の人生を、自分史として残すことを考えたのは、十数年前にタイから帰ってきた夫の信三が勧めてくれたからでした。しかし、日常的な忙しさの中でそれも忘れていた頃、佐保会(奈良女高師の同窓会)大阪支部の方から女高師での思い出話を書いてほしいと依頼を受けました。この執筆に勢いを得て五年がかりで、尋常小学校時代、夕陽の生徒時代、夕陽での新米教師から転じて新制天王寺高校での男女共学を経験し、新制高校で卒業生を送り出した時点まで、五編の「思い出の記」を友人や年賀状を下さる皆さんにお読みいただきました。これらは、本書の第一、二章の核となった文書です。「思い出の記の続編を楽しみにしています」のリクエストをたくさんいただきましたが、気力の点で「書く」の再開には至りませんでした。

九十五歳で介護生活に入った中で「もう(書くのは)ええよ」でしたが、執念深い信三は何とか百歳までにと、資料の整理をしながら私の詳細な履歴書を作成し、いくつもの段ボール箱に山とあった関連資料の確認と整理を続けて私に質問しつつ、対話によって私の執筆を支えてくれたのです。

九十九歳の白寿を迎え、3月には踊りのお弟子さんたちが「一寿先生白寿記念の踊りの会」をやってくれました。久しぶりの踊りの後、「天女の会」を名乗る教え子のグループが「白寿の鞠谷先生と対話する会」を開催してくれ、若い人たちから元気をもらいました。百歳を前にしてこれらが本書の執筆を加速し、仕上げへと向かわせてくれたのです。

今まで書いてきた多くの文書・論考をベースに、暦年の出来事や体験を補足し、関連して友人、教え子やお弟子さんたちからの多数のお手紙から選別し(ごめんなさい、ストーリーの流れがあつてすべてを掲載することはできませんでした)、まとめさせていただいたのが本書です。

目次をご覧になればおわかりのように、多彩とも、あるいは一見「ごたまぜ」とも見えますが、教育を中心軸にして私の「生き方」が、物語風にでき上がったのではないかと考えています。歴史的な点から註釈が多くなっていますが、まずは無視してお読みいただき、2回目には註釈と、必要に応じて資料1の年表も参照しながら読み進められてはいかがでしょうか。でき具合は皆さんのご判断を待つしかありませんが、もし読まれた方がご自身の豊かなご長寿にむけて、なにがしか力になる話の一つでもありましたら、それに優る喜びはありません。

最後になりましたが、貴重な編集の労をとっていただいた、天女の会はじめ多くの方々から心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

2024年10月
鞠谷美規子

目次

はじめに	3
------------	---

第一編 軍国主義的教育下の少女

第一章 誕生から敗戦までの教育 (1925年~1945年9月)	11
1-1 誕生から尋常小学校卒業まで	11
1-2 旧制高等女学校と十五年戦争下の進路決定	27
1-3 旧制女子高等師範学校での戦時下の教育	41
1-4 敗戦(軍国主義的教育の崩壊と平和)をどう受け止めたか?	49

第二編 民主的学校教育

第二章 米田先生と男女共学 (1945年10月~1948年3月)	61
2-1 敗戦直後の高等女学校と新教育の試行	61
2-2 男女共学と新制高等学校への移行	73
第三章 「ヨネブー」流教育の科学的教育への展開 (1948年~1987年3月)	89
3-1 居候の「研究?」活動	89
3-2 ヨネブーの「男勝り」授業	93
3-3 生徒の感性と理性が動く「科学的」教育	105
3-4 私立女子高校医進系クラスで最後の学校授業	122

第三編 社会人教育 (1970年代から2020年頃まで)

第四章 多彩な芸能活動の実践と伝授	129
4-1 「芸は身を助ける」の仕合せ? その1——日本舞踊	129
4-2 「芸は身を助ける」の仕合せ? その2——声楽、書道、日本画	151

第五章 ボランティアの教育・研究活動の果実は

『戦争を生きた女たち——証言・国防婦人会』の刊行	161
5-1 情報ボランティアグループを担当	161
5-2 情報ボランティアグループの活動	162
5-3 ボランティアグループの活動成果が「本」に	183
5-4 出版後の反響	184

第六章 「大人」を元気づけた社会人教育活動

6-1 日本史友の会	189
6-2 寝屋川「史の会」	195
6-3 「日本史・あしび」と岸和田建老大学(男女共学)	207
6-4 多様なテーマでの講演・講義行脚	211

第四編 九十九歳への暮らしと命

第七章 糊谷美規子・一寿の九十年代

7-1 喜寿の会と米寿の会	223
7-2 「思い出の記」五編の執筆と「店じまい」	229
7-3 日本舞踊は?	230
7-4 身体的現状	234
7-5 九十九歳、白寿を迎えて	237

註釈	241
----------	-----

資料	259
----------	-----

さようならは言わない(糊谷信三)	296
------------------------	-----

第

一

編

軍国主義的教育下の少女

第一章 誕生から敗戦までの教育 (1925年～1945年9月)

1-1 誕生から尋常小学校卒業まで

- 1925年(大正14年)3月31日／米田美規子 大阪市に生まれる
- 1931年(昭和6年)4月／大阪南区立御津尋常小学校 入学
- 1937年(昭和12年)3月／同 卒業

私の母は沼田家の子どもたち6人の長女でした。沼田家は生活レベルでいえば現在の中流の上だったでしょうか。母は、明治生まれの「長女であること」をわきまえた人でした。私が生まれて1年後に、ただ一人の弟(当時、高校生)が病に倒れたので、母はますますその傾向を強めたのかもしれない。

そんな母でしたが、初孫として可愛がってくれた祖父の私への偏愛には逆らわぬようにして、また同時に、良家の長女であったがために自分がやりたかったのにできなかったことを含めて、私には好きなことを好きなだけやらせる、そんな方針で育ててくれました。ちょうど、ラジオ放送が始まったところで、ラジオから流れる歌のまねだけではなく、三味線の音に合わせて踊っていたそうです。母の

配慮で、6歳の6月6日に踊りを習い始めたのは、その一例でした。唯一の男子の死が家族に伝えられた時、たまたま私を抱いていた叔母が「エッ！」と驚いて、抱いていた私を落としてしまいました。それでも私は何のけがもなかったもので、その後は「ミーちゃん」は運の強い子だと、今まで以上にみんなに可愛がられるようになったのです。

しかし、私の教育のはじまりは、軍国主義的教育が勢いを強めつつあるなかでの小学校で、現在の社会科の大部分は日本史、つまり国史でした。その本質は神話もどきでしかなかったことは、後に掲げる詩が示しています。当然ながら子どもなりに楽しんだことも多々ありました。卒業時には、小学校は大阪市立になっていて、戦後の学制改革によって市立南中学校となり、後にそれも移転して、現在は旧地(ホテル日航大阪の一筋南)に石碑が残るのみです。

次の文書は10年ほど前に書いた5つの「思い出の記」の1つです。本書では、執筆順ではなく時代順に掲載していますので一部の記述に齟齬がありますが、「そのまま」で採録させていただきます：

大正生まれの幼少時代の思い出(大正14年3月~昭和12年3月)

1. はじめに

我ながら信じられないことなのですが、敗戦後70年を過ぎて今の私は90歳代を生きている。戦後の70年間を通じて「歴史」を教え、一世紀という時間の長さを幾度かしゃべって来たのだ。その一世紀に近い歳月の重みは何物にも代えがたいものだ——と考えながらも、体力だけではなく気力の衰えをも感じざるを得ないこの頃である。米寿の年に、奈良女高師^{*}同窓会の大阪支部から学生時代の思い出話を会誌に書くよう依頼され、その記事を皆さんにお送りして始まった年初めの文書、歳と共にすらすらとは書けなくなるのはやはり90歳代にとっての「筆の」重みであるろうか。

さて今回の主題は何にすべきだろうか？ 時代的に前回の続きとなるのは戦後の新制高校における教育活動なのだが、記憶も年ごとに薄れつつある女高師時代以前、昭和初期の話も一度はしてみたい……と決心が定まらないままに日が過ぎてゆき、「エエイ、ママヨ！」と子供の頃の思い出を「つれづれなるままに」書きはじめたのは、師走も半ばを過ぎてからであった。

*女高師:女子高等師範学校

2. 誕生日は3月31日？

私が父米田正一と母利^{とし}の長女として生まれたのは、戸籍では大正14年3月31日となっている。大正15年は短くて直ぐに昭和元年となったから、わたしは昭和1年3月31日に一歳の誕生日を迎え、奇しくも昭和何年の「何」が私の年齢と一致することになった。(いわゆる「数え」では、昭和年+1となる。) 私が92歳になる今年、2017年は昭和で言えば92年です。さて、問題は誕生日で後に母が明かしてくれたのは、私の本当の誕生日は4月6日だったが、産婆さんとも相談して一週間早い日として役場に出生届を出したと言うのです。結婚後、「私には誕生日が2回あるから、お祝いも2回やって！」と連れ合いに言ったら、「エエッ、何のこっちゃ？」と驚いていた。ダンナに言わせると、「お前の偽りの人生の始まりやナ！」であった。

しかしこれには後日談がある。結婚後しばらくして姑と二人でしゃべっていたら、彼女が言った事は「太平洋戦争中だったあの子の誕生日は、産婆さんに頼んで皇太子と同じ(現在の今上天皇、従って平成になって天皇誕生日)にしたんよ」だった！ なんのことは無い、彼もそうと知らずに「偽り」の人生を歩んできたのである。「二人一緒に偽りの人生を生きてるんだ！」とはしゃいでいたら、彼は複雑な表情をしていた。

3. 「コロッケ」が私のアダ名

第一子の女の子は「小さく生み、大きく育てる」のが理想的と言われて

いて、母の並みならぬ努力があって私はすくすくと育ったのであろう。世間で「良い」と言われていることはすべてやったという母は、私に向かって「あんたの色が黒いのは、私がいろいろな薬を飲み過ぎたかららしいヨ」と何度も言うのだ。私はこれをどう受け止めればよかったのだろうか？ 丸くこねて揚げたコロッケは、お肉屋さんのではない母の手料理で我が家のご馳走であり、私の大好物だった！ こうして丸く揚げられたコロッケが私のあだ名となった。揚げたてを30個ばかり食卓の真ん中にデンと置かれた「勇姿」はやっぱり私なのかナアと、今はもうお目に掛かれない山と積まれたコロッケが幼少時のなつかしい思い出の一つだ。

ここで私の母について少し触れておきたい。母、利は沼田家の祖父母の長女として明治37年に生まれ、5人の妹と1人の弟の大家族であった。大家族だったと私が言うのは、長女だった母は結婚後もしばらくは祖父母と同居し4人の叔母が居た。そして、最後の叔母が加わり（つまり母の末妹は私より年下）、母の次の妹は結婚して家を出たが、出産して直ぐに子供たちを連れてしばしば立ち寄っていたのだから、それはスゴイ大家族であったろう。母が祖母を助けてその切り盛りで、てんてこ舞いであったことは容易に想像できる。

祖父母の次男は早くに亡くなっていたので、唯一の男子であった長男は、小学校を5年、中学校を4年（戦前の制度で、成績トップにのみ認められた「飛び級」である）で卒業して普通より2年早く旧制の高校生となっていた。しかし、沼田家の期待の星であった秀才の誉れ高いその叔父は、高校2年生の夏、脳出血であっけなく世を去ってしまった。病院からその知らせがあった時、偶々私を抱いていた叔母は驚いて思わず手を放し、私は地面に落とされたという。祖父母はいわずもがな、母にとっても衝撃的な悲しみであったろう。2、3年してその悲しみもなんとか受け止められつつあった時に話題になったのが、スッテンコロリと落ちた私の話。コロッケのようにまるまるとしていたことと、幸運にも打ちどころが悪くは無かったせいで怪我もなく元気だった事だそうである。「こ

の児、運の強い子や！」はまだしも、「地面に落とされた子」のレッテルは気に入らなかったが。まあ、若くして死んだ叔父が、それを聞いて天国で笑ってくれていたのかも知れない。結果として、母は3人の女子を産み育てたが、遂に男子には恵まれなかった。何につけても女が男より強い、世にいう女系家族の典型例ともいえる家庭であった。

4. 南区立御津尋常小学校

はじめに書いたように、大正14年3月31日生まれの私は、お蔭でと言うかそのせいで、一年早く小学校に入学し、同級生の中では一番のチビで学校生活を通すことになった。産婆さんの助言を受け入れた母は、子育てに苦勞しながらも、第一子（私）を良い学校に通学させることを考えていたようだ。秀才をうたわれた叔父の急死が影響したのかもしれない。いい学校があったら、戸籍を移して（いわゆる寄留して）通学させることができると入れ知恵された母は、当時評判だった南区立御津尋常小学校の校区の知り合いを当たり、たまたま出入りの呉服屋さんがその校区内に居住している事を知って大喜び。私は母の熱意によって昭和6年4月には御津小学校に入学することになった。その場所は今の中央区清水町で、戦後の新制中学校制度の施行にともない大阪市立南中学となった所である。現在のホテル日航大阪の一筋南にあって、東へ御堂筋を渡って大丸・そごう百貨店、そして心齋橋筋まで子供の足でも数分の距離にあった。

母が熱望したその御津尋常小学校は、木造が普通であった当時の小学校のなかでは異例で、新築間もない建物は地上4階、地下1階の鉄筋コンクリート製でエレベーターが設置されていて、冬用のスチーム暖房が完備されている、当時は大阪一の偉容を誇る校舎であった。南区立と言うことで心齋橋筋や堀江の商店主がこぞって寄付をして完成させたようで、後に大阪市立となってからはこうした特別扱いは認められなくなったであろう。広い講堂の天井回りの飾り窓は美しいステンドグラス製

で、壁に彫り込まれた学校の紋章が陽の光を浴びて輝いていたのを今も覚えている。

今では小学校のお昼の給食は当たり前のことになってしまったが、これは戦後の学制改革によるもので、当時は御津小学校であっても調理室や食堂は無縁であった。校区内の生徒は帰宅して自宅で昼食をすませ、午後には再登校して授業を受けることになる。私のような区外生が全校で20数人居たろうか、ほとんどがお弁当持ちであった。さらに、校区内の生徒の中には昼も忙しい商店の両親の要望で、子供が帰宅するのではなく弁当が届けられる場合もあった。そうした生徒の昼食用に、地下の一室が充てられていた。食堂とは名ばかりで三人掛けの長椅子がならべられていただけだが、母親の心がこもったお弁当の時間は当然のことながら楽しいものだった。中でも忘れられないのは、地下室へ昼食時になると届く大きな弁当箱であった。それは今も有名な老舗Mの一人娘である「こいさん」のもとに届けられるもので、時には仲良しパーティのような昼食会になる。「こいさん」の兄ちゃんと私は同級生で、今も同窓クラス会のお世話をお願いしているが、お互いに歳をとって思うようにはお逢いできずにいる。このように仲良しが集まってそれぞれの弁当を、あるときには分け合いながらのお昼は本当に楽しく、結果として学年を越えた貴重な体験となった。

時々家の事情で弁当なしの日もあり、生徒の夕食は認められていなかったから、すぐ近くのパン屋さん「キムラ屋」に走ったこともある。「ジャムだけにして」とか「バターとジャムを半分ずつぬって」などの子供たちの要求に、「よっしゃ、よっしゃ」といつも優しいオッチャンだった。食パンの味と共に、今もあのオッチャンその後どうなったんやろかと想い出すことがある。同級生のAさんはその仲間で、あのトーストおいしかったネと今もって話のネタになる。

しかし時は昭和初期、世界平和を願ったはずの「昭和」の年号とは裏腹に、昭和6年には満州「事変」と称した戦争が始められていた。世にいう

十五年戦争の時代に突入しつつあったのだ。大正12年の関東大震災後に大阪が日本の商工業の中心として勢いづいていた時代だったとはいえ、校区内の生徒には帰宅しても昼食はわずかで、午後には店の手伝いを余儀なくされて再登校しない生徒もいたし、数は少なくとも弁当も持たせてもらえず地下に降りてこないで校庭で昼の時間を過ごした生徒もいたはずである。学校給食のおかげで、子供たちみんなが昼食をとれるようになったことは、やはり高く評価すべきことであろう。その上に、私たちが体験したような子供それぞれの多様性と、「みんなで分かち合うことの大切さ」とを、食事の時間をも含めて、世界中の子供たちが体験できるような教育の場はどうすれば実現できるのだろうか。

5. わが通学路は「心齋橋筋」

住吉の家から御津小学校まで6年間の通学路は、南海電車で難波へ、そして、難波から現在の地下鉄御堂筋線心齋橋駅までの一駅分を歩いて通うもので、今となってはありきたりの経路である。しかし、昭和初期には關一せきはじめ大阪市長のもと、御堂筋では梅田からの地下鉄工事が進行中で、難波からは戎橋筋、さらに道頓堀から心齋橋筋が横堀川までは既に大阪の中心的な商店街として発展していて、活気ある大阪市の中でも特ににぎわっていた地域であった。ここでは私たちの使い方に従って、戎橋筋と心齋橋筋をまとめて「心齋橋筋」とする。発展中だった心齋橋筋の、大きな変貌の様子を垣間見るのも一興であろう。

六歳の子供にとって、ランドセルを背負っての電車通学は大仕事のはずだが、私にとってちょっとは大人になった気分で闊歩する心齋橋筋は、正に「我が道」であった。通学の際の記憶かどうか定かではないが、心齋橋筋にあった「大丸呉服店」では、店に入り下駄を脱いで畳敷きになると、粋な番頭さんが現れて挨拶もそこそこに、お客さん向きに選んできた呉服をサアーと手際よく流して見せていた。店の敷居を跨いだ時点で、番頭さんはそのお客さんに向けた生地や呉服を即時に判断して行動

を開始しているのである。こんな呉服屋さんの雰囲気は、今では全国各地に行っても味わうことは出来ないのではと思う。数少なくなってしまうが、昔ながらの「小大丸」さん、漆塗り専門のお箸屋さん、同級生のMさんの塩昆布屋さんなどは今も営業されている。同級生はもういないし、それらの店も代替わりして久しい(二代目どころか三代目、四代目かも)であろうが、つつい立ち寄りたくなる。薄れ行く記憶の中で今も思い出す明治・大正の面影を残した、「現代化」が進む前の心齋橋筋だ。その大丸呉服店が壮大な八階建ての百貨店となり、やがて十合呉服店も加わって、商店街の様子は様変わりしていった。

今では聞くことが無くなってしまったが、みなさんは「誓文払」を憶えておられるだろうか。毎年10月の誓文払いは心齋橋筋で展開される大安売りの一大イベントだった。それぞれの店先には商品が山のように積まれ、売り子さんたちは声をからしてお客さんに呼びかけていた。集まったお客さんたちは商品をながめすかして、気にいったものを買って行く。二学年下の妹と二人での帰路、私が足を止めたのはマイクのボリュームを最大にして宣伝に努めていたレコード店だった。その時に流れていたのは「涙の渡り鳥」という流行歌だった。何故かメロディが気に入って、店先に張り付いて何度も何度も聞いてヤット歌えるようになりルンルン気分でその店を離れた私だったが、フト見ると妹は高級宝石店「芝翫香」の店頭で財布など小物類を次々に見て回っているではないか。近づいてゆくと、ようやくお気に入りを見つけたのか財布を買って彼女もルンルンである。

二人で帰宅して夕食のとき、この冒険談を話したら父は不機嫌な顔になって、私には「流行歌みたいなもの唄うな!」と一喝し、妹には「そういうのは、子供が買うものではない」と一言。シュンとなった私たちは納得の行かぬままに、私は「雨の日も、風の日も……」と声は出さずに歌い続け、妹はその小物を本箱の引き出しに大切にしまって、毎日何回も眺めていた。やっぱりと言うか、年子の妹は姉である私よりも小さな時

からませていたようだ。なにしろ、選りに選ってあの芝翫香の店先で子供が立ち止まったのだから、今にして思えば、父のあの一言は極めてまっとうな発言だったろう。子供心には「納得の行かぬまま」であったことが不満ではあったが、子供とは違った「大人であること」の意味をどう説明したら子供は納得できるのか、教育上げっこう難しい問題かもしれない。

6. 赤い手毬と「汚おい舟」

女の子なら一度はあるだろう、私も買ってもらったばかりの赤いゴム製のお手毬に夢中になって、肌身離さず持ち歩き、あげくは学校の行き帰り途でも毬つきをしながら、という打ち込み様だった。心齋橋筋を避けての帰り途でのことだったのだろう、横堀川の橋のたもとで毬つきをしていたら、一寸手がそれた瞬間に大切な手毬がポーンと川に落ちてしまった。橋の欄干をよじ上って川面を見たら何という事か、手毬はそこに繋がれてあった汚おい舟に引っかかって止まっていたのだ。子供心にも降りてそこまで行くことは無理だと判ったが、昼下がりの道には人影も無く半べそをかくしかなかった。そこへ、天秤に満杯の2つの桶を肩に掛けてよいしょ、よいしょと掛け声をかけながら、汚おい舟のオッチャンが帰ってきたのである。渡し板を懸けて舟に向かったオッチャンに、「おじちゃんその手毬、とって!」と女の子の声。顔を挙げて欄干から身をせり出している私を認めたオッチャンは、「よおし、そこでまっとれよ!」と返して桶をそーっと置いて、おもむろに手毬を掴んで立ち上がり、「ホレ!」と投げ返してくれたのだ。

「アリガトー」と半べその私は、一所懸命だったのに声にならないような声をだした。その嬉しさと有難さは胸に沁みるものだったが、それと同時に汚おい船の何たるかにやっとな気付いて戸惑いを隠せなかったのだ。涙が出るほどうれしかったのに「汚おい舟=汚い仕事」と連想した瞬間から、素直な喜びだけではないもう一人の自分が意識されたのである。しかし、手毬は私の腕の中にしかとある。それを確認し「おじちゃん、

ありがとう！」と、今度は心の底からの大声でお礼を言った。「もう落とすなや」と笑いながら返事してくれたオッチャンは、舟を操って去って行った。

それから何年経ったのだろうか？ 私は思いがけず手毬に関わったこのおじちゃんの仕事を変えて認識することになった。女学校での国史の授業時間中、江戸時代の経済関係の話で大阪の綿業が紹介され、そこで平野ひらのでの木綿栽培が説明された。大阪に住んで居ながら地場産業の歴史に疎かった私は、興味をそそられると同時に、何故か赤い手毬の一件を思い出した。近世以来の河内の綿業の発展を支えたのは、一に淀川・大和川（古くは北へ河内を流れて淀川に合流していたが、河内農民の努力もあって江戸前半期に住吉から大阪湾に直接流入する現在の姿になった）^{註4}水系の水運の整備、二に豊富な労働力、三に肥料の供給であった。江戸時代における農業の発展にとって肥料の重要性は言うまでもないが、下水道が整備される以前の都市における最も大きな環境問題は汚物の処理であったから、農業用肥料としての有効利用は最も有効な農業政策であると同時に都市環境保全の施策でもあった。私の手に返ってきた赤い手毬は汚い舟のオッチャンの助けがあったからこそと、あの時の感動が蘇ってきたのである。^{註5}河内や摂津だけではなく、江戸中期の17世紀にはほぼ全国の主要都市で確立されたと考えられるこの環境にやさしい施策は、エコシステムの先駆けとして世界的にも高く評価されるものであった。^{註6}

7. 母の願いと父の訓育

(1) 花嫁修業への抵抗

「売り家と唐様で書く三代目」とは江戸時代の有名な川柳である。これは明治・大正期をへて昭和初期まで、特に、商家の教訓として流布していた。一方、商家の娘たちは茶道、華道、琴三絃、お裁縫などのお稽古を積んで一応の腕前を身につけて花嫁候補となる。ここで「一応の」腕

前とは、（実際は免状授与のレベルに達していても）師範の免状授与の前でお稽古をやめさせて、免許を得ることなく花嫁として家を出てゆくことを意味していた。下手に師範の免状を持ち弟子をとって師匠になると、嫁に行き遅れると心配したのであろう。戦国・江戸時代の武家と同じく、娘をできるだけ良い嫁ぎ先に送り出すことは、娘の幸せのみならず家運にも大きく影響することであった。母はこのことに若い時から疑問を持ち続けていたと言う。「折角修行を積んだのに、それを途中でやめさせるのはおかしい！」と考え、「自分の子供には、何でも好きなことを習わせてその奥義を窮めさせたい」と決めていたそうである。大正デモクラシーの影響下にあった父もそれに賛同していた節がある。

(2) 「おどり」のお稽古

そこで長女の私の出番となる。私は三歳のころから踊りが好きだったようで、ラジオから流れる邦楽に合わせて踊っていたようだ。当時「六歳の六月六日に稽古を始める」のが流行(?)だったそうで、母は良い師匠を探していたが難航し、6月も近くになって近所の津田英学塾卒業の娘さんに弟子入りを頼み込んで受け入れられ、私は着物を着せてもらって踊ることで喜び一杯だった。しかし、しばらくしてこの先生は東京での就職が決まって私のお稽古は中断となった。それでも、宙ぶらりん状態のままに自分一人で踊っていた私を見て、母はきちんとしたお師匠さんを探している間に、数年が過ぎてしまった。やっと出逢ったのが若柳流で堀江にお稽古場を持っていた先生だった。堀江は御津小学校のすぐ西であり、御津で同級のMさんがその近所から通っていると聞き、私は晴れて若柳流に入門して日本舞踊を習う事になった。昭和11年、つまり十一歳の時のことである。翌年、夕陽丘高等女学校に入学後も週二回堀江の稽古場まで、叔母の一人と一緒に市電に乗って通った。学業の傍ら踊りにも熱中したが、日中戦争が拡大して太平洋戦争となり、遂に大阪大空襲でお稽古場は焼き払われ、お師匠さんも行方知れずになって、踊